気品のある音楽と大きな物語の感動

『ショウ・ボート』

SENDA AKIHIKO 扇田昭彦

富山市のオーバード・ホール（富山市芸術文化ホール）が2011年から続けてきた「名作ミュージカル上演シリーズ」の第5弾として、ついにブロードウェイ・ミュージカルの金字塔とも言える大作『ショウ・ボート』が登場した（富山市民文化事業団企画・制作。3月12日～15日。12日の昼と夜観劇）。このシリーズの集大成と言える公演である。

エドナ・ファーバーの長編小説を原作にしてジェローム・カーンが作曲し、オスカー・ハマースタイン2世が脚本・作詞を手掛けた『ショウ・ボート』は1927年にブロードウェイで初演され大ヒットした。ミュージカル草創期の作品だが、気品のある音楽の美しさ、大衆芸能と家族の変遷を描く大きな物語、黒人差別を正面から描いた社会性などが一体化した傑作である。ミュージカル・コメディー全盛の時代にこういうシリアスな味わいの傑作が生まれたことは奇跡的でもある。日本では宝塚歌劇と名古屋市文化振興事業団で上演されているが、私は観ていないので、新しい上演を切望してきた。

私は1994年にハロルド・プリンス演出、スーザン・ストローマン振付の『ショウ・ボート』をブロードウェイで観て強い感銘を受けたが、今回の富山公演（ロジャー・カステヤーノ演出・振付、八幡茂・音楽監督、井上サチ子衣裳、奈木隆・芸術監督）もこの優れたハロルド・プリンス版に基づく上演だった。

開演すると、広い舞台の奥から大きな美しい白い船がゆっくりと滑り出てきた。1880年代末、ミシシッピ川を航行しながら、大衆的なショウを見せるショウ・ボートの登場である。舞台前面に横づけされた3層から成る船の装置（土屋茂昭・舞台美術）は驚くほど大きく、この公演のスケール感を実感した。セットというよりは建造物という感じの装置なのだ。船の装置の裏側はショウを上演する芝居小屋になっている。

ショウ・ボートを出迎える黒人奴隷の労働者たちの活気ある歌「コットン・ブロッサム」が早くも南部の黒人たちが置かれた状況の一端を明らかにする。

「あくせく働くのは／いつでも黒人さ／船に綿を積み込む／死ぬまで休めない」（高橋知伽江訳詞）

やがてショウ・ボートのアンディ船長（浜畑賢吉）の愛娘マグノリア（土居裕子）と、放浪の賭博師ゲイロード（岡幸二郎）が初めて出会って歌う「メイク・ビリーブ」。想像力の「ゲーム」で恋人同士になった気分になるという機知に富んだ歌だが、メロディーは信じられないほど美しい。ひたむきな純粋さがほとばしり出るような土居の澄んだ歌声と、張りのある甘美な声で高音のクライマックスへと高まる岡の歌は見事に調和し、まるでオペラの場面のようだ。

そして、この場面の後で、黒人ジョーが歌う名曲「オール・マン・リバー」が登場する。ジョー役の、クラシック出身の長谷川大祐がよく響くすばらしい声量で歌う歌は圧巻だった。黒人労働者のつらさを歌う歌だが、同時にこの歌にはあらゆる人間の営みを悠久の高みから静かに眺めるような視点がある。

「年老いたオール・マン・リバー／賢いが　無口だよ／今日もまた流れてゆくよ」

つまり、これらの歌が示すように、『ショウ・ボート』は2つの視点から成るミュージカルであるように思われる。第一は若い白人たちの愛と結婚と別れ、差別を受ける黒人たちの苦難といった等身大の男女たちの姿に、共感しつつ親しく寄り添う視点。

第二は、そのような人間たちの愛と苦しみを知りつつも、何も語らず、ただ「永遠に流れ続ける」大河や大地のような巨視的な眼。

『ショウ・ボート』という作品に対して私たちが覚える特別な感じは、この2つの視点の共存、特に第二の視点の存在のためではないかと、この舞台を観ながら私は感じたのだった。劇中で流れる親子3代にわたる約40年という異様に長い時間も、おそらくこの悠久の時間と無関係ではないだろう。

出演者の多くはオーディションで選ばれ、クイーニー役の田中利花、コンビを組む芸人役の本間憲一と北村岳子など最適の演技陣が集まった。

『ハロー・ドーリー！』（2012年、'13年）と『ミー&マイガール』（'13年）で主演を務めた剣幸は、今回は黒人の血を引くためにショウ・ボートを追放される歌手ジュリーの役。第一幕でジュリーが歌う「愛さずにいられない」は無類に楽しく、第二幕で酒浸りになった彼女が歌う「ビル」は切なく胸にしみた。

『ショウ・ボート』の岡幸二郎と、土居裕子。（写真提供：（公財）富山市民文化事業団）

『ショウ・ボート』の北村岳子と、本間憲一。（写真提供：（公財）富山市民文化事業団）

第二幕では舞台はシカゴに移り、破産したゲイロードとマグノリアの別れが描かれる。ナイトクラブに新人の歌手として登場したものの、観客に相手にされないマグノリアを、父のアンディ船長が懸命に励まして成功に導く場面は実に感動的だ。土居が歌う「舞踏会の後で」の華やかな旋律が耳に残る。

そして最終場面の1927年、舞台は再びショウ・ボートへ。ブロードウェイのスターだったマグノリアはすでに引退し、ここで年老いたゲイロードと再会する。船の前ではマグノリアの娘で、ブロードウェイの新しいスターになったキムとその仲間たちによる最新のダンス、チャールストンがにぎやかに披露される。退場していく旧世代と勢いのいい新世代との鮮やかな対比が見事だ。そして光の中でかつての夫婦は再び静かに抱き合う。

大作『ショウ・ボート』を富山のスタッフ、キャストが高いレベルで見事に演じ切ったことに私は感動した。この『ショウ・ボート』の成果は、地方の一公共劇場の出来事という次元を超えて、日本のミュージカル界の大きな事件と言えるのではないか。そして、この稀有な舞台を、東京など富山以外でもぜひ見せてほしいと思う。今回の船の装置は公演後も保存されるという。再演の機会を待ちたい。

（演劇評論家）